



ピノコパパのエッ
セイ集から



続 神々の国

pinokopapa

妖怪のこと

妖怪のこと

げげの女房で復活した観のある水木茂氏の地元、境港に車で行ったことがあります。今は、妖怪と言えば境港ということになってしまっていますが、本当は松江だったのではないのでしょうか。なんといっても 小泉八雲氏 の町なんですから。小泉八雲氏は、松江ではヘルン先生と呼ばれて、今でもそこにいるかのように言われておりました。ヘルン先生は私にも縁のない人ではなく、彼が英語の教師をされていた松江師学校は島根大学の前身でした。松江の人は、多分その人が見たわけではないと思うのですが、ヘルン先生は毎日人力車で学校に通っていたと、懐かしそうに話します。

しかしヘルン先生が松江にいたのは、ほんの2年ほどだったはずです。そしてここで小泉節子嬢と結婚しております。セツ 女は土族の子女でありました。この結婚を期に、ヘルン先生は日本国籍を収得し、小泉八雲となりました。しかし八雲氏は日本語が読めなかったので、この妻、セツ 女から日本の様々な民話、特に怪談、妖怪話を聞いたそうです。そこから 名作 怪談 が生まれたのですが、松江に暮らしたものとしては、深く思うことがあります。松江の言葉は、出雲ズーズー弁と言って、東北のズーズー弁とよく似ています。またそのズーズー弁も、庶民とは違った土族言葉があったそうです。言葉のくせは一生抜けないもののようなので、セツ女は土族ズーズー弁で一生懸命、夫の求めるままに、アラビアンナイトを毎晩語るように様々な説話を語って聞かせたのでしょう。その愛情が、小泉八雲という文学者を作ったと思います。

しかし、今よりも闇の深い松江の武家屋敷で、ランプの明かりの中、妖怪はセツ女の言葉でかたられました。普門院の怪異も、月照寺の石の亀が闇夜には松平家の墓を守るために歩き回る亀ことも、堀川の河童ことも語られたのだと思います。

私も、アルバイトから帰るとき、闇夜に堀川を自転車を走っていると、気のせいか、なにか気配がするのです。

神々の国

神々の国の首都と、小泉八雲氏が呼んだのが松江でありました。ヘルン先生が結婚した 小泉節子嬢は、出雲国造の千家に繋がる人でした。つまり相当由緒ある家系のお方でありました。

この出雲国造につながる千家についての解説は、司馬遼太郎氏がそのエッセイで詳しく述べておられます。千家は神代の出雲の国主であった家系で、所謂国譲りの伝説の後、出雲大社の宮司、神職を受け継いできた家系でした。そして出雲大社では宮司、神職のことを国造、くにのみやつこ、こくぞう、と称してきました。ですから、司馬氏によれば、島根県では念頭の挨拶は今でも、県知事と並んで 国造 の方がされるそうです。島根県民にとって国造は今も国主です。そして司馬氏は、銀行の頭取をされていた千家末裔のが、酒の席で、大和にしてやられたと嘆いていたとも記しておりました。

その名家につながるお人が、なぜか異人さんと結婚されたのでした。ちょっと奇異に思えますが、結婚してみるとヘルン先生はとても人柄のいいお方だったらしく、セツ女の家人を皆養って、子供も四人生まれております。そのためヘルン先生は高い俸給を貰える学校を求めて、熊本、神戸、東京と転勤して行きますが、そのヘルン先生の熊本と東京での英語の教職を奪ったのが漱石でありました。ヘルン先生の俸給は漱石先生の何倍もでしたから仕方なかったのかもしれませんが。しかし漱石先生に替わったことに不満を感じ、漱石何するものぞ、と英文科をやめ、法学科に移っていった学生がいたそうです。

そんなヘルン先生にセツ女は献身的に仕え、ヘルン先生の求めるまま、下女や近隣人、その他色々な人から昔話や伝説を聞き集め、語って聞かせました。それを文学にまで高めたのが怪談でありました。ところが、これとその他の作品は、皆。英語で書かれ、海外で発表されたのみで日本で発表されたのはヘルン先生の死後でありました。そこにも言い知れぬ何か、奥ゆかしさを感じます。

さて、私が松江にいた時も早や町は明るく、建物も他の都市と変わりませんでした。町中を自動車やバスが走り、ヘルン先生のいた頃の面影など、ついぞ無いに等しかったと思います。しかし、表通りを入り、街燈がわずかに照らすだけの闇の中を自転車の灯りだけを頼りに走っていると、ランプの明かりの下で セツ女 がヘルン先生に話して聞かせている、物静かな出雲ズーズー弁が聞こえてくるような、そんな気がいたしました。闇の中の松江は、まだ神々の国でありました。

伊勢のこと 一

伊勢と紀伊半島は華窟神社、熊野三山、金峯山寺、熊野古道と、謎に満ちたところです。そしてこれらは聖武天皇が東大寺大仏を建立し、仏教を国教としたあたりからないがしろにされはじめました。これといった小難しい教義ももたず、社殿も仰々しいご神体もく、ただ自然を畏れ敬い祈ることだけの信仰ですから。あの時代から日本人って舶来ものが高級に見えてたのでしょうか。人間にだけ興味のある仏教なんかより、ずうっとやさしさに満ちた信仰だと思っております。

私の 神道 に関する知識は、実は司馬遼太郎氏の この国のかたち というエッセイからです。この国のかちの 五巻 の 神道 1～七 の文章をかつて読んで、忘れていました。それをひょっと思い出し、見返してみると実に正確でかつ深い洞察の文章でした。さすがに 司馬史学。

神道に、教祖も教義もない。

畏れを覚えればすぐ、そのまわりを清め、にだりに足を踏み入れてけがさぬようにした。これが神道だった。

司馬史学はこう語ります。そして

社殿、拝殿は必要とせず、敬虔な心で祈り、神から現世の利をねだるという現世利益の卑しさはなかった。

と語り、これを古神道と呼びます。ところがこの国に仏教が入り、山伏の出現し、政治が神道自身の姿も変えようとして仏教国家を宣命したりもし、遂には国家神道への変容を強いたりしましたが、それらの重圧が取り除かれると、この自然な信仰はまた元に戻って生き残ってきました。日本人が一見無節操な無神論者に見えるのも、もともと自然な形でのこんな古神道のあり方を心に持っているからかも知れません。お伊勢参りでいいじゃありませんか。国家神道の暗い記憶は忘れて神宮に参ってみましょう。自分の体の中から、自然と祈りの心が湧いてくる気がするはずですよ。

伊勢のこと 二

記紀の中に、あまてらすおおみかみ すさのお とある中で一方のヒーローは やまとたけるのみこと でしょう。このみことは東奔西走して従わない神々を平らげてきましたが、何故か都に入れてもらえずに病を得て亡くなってしまいます。そして白鳥となって飛び立ち、河内とか兵庫の方へとんでゆくのですが、舞い降りたところのことはかかれていなかったと思います。しかし、その白鳥が舞い降りたという伝説が東かがわ市にあり、そこに白鳥神 が祭られております。四国は昔から遠い国だったのでしょう。崇徳上皇も流されてきております。やまとたけるのみことも、なくなった後も都には入れてもらえず、遠くこの地にお鎮まりになってもらっているのでしょうか。

崇徳上皇

讃岐に流された崇徳上皇については、いまでこそ左程語られることもなくなりますが、香川の昔について語ろうとすると、この日本史上最大の怨霊とされた上皇のことはどうしても語らなければなりません。そしてこれもあまり知られておりませんが上皇と同等の怨霊、祟り神と恐れられた菅原道真公のことも、語るに十分なもことが、大宰府だけでなく、この讃岐にもあります。

観音寺の琴弾公園の中の 琴弾神社 奥の院に上がっていく参道にはたくさんの小社が並んで祭られております。その中に、他とは違って一段大きく作られた菅原天満宮の社があります。つい昔、私の子供二人がそれぞれ受験であったとき、私は機会あるごとに参道の石段を、息を切らして上がって行き、他のときとは違ってお賽銭もはずみ、子供の合格を祈願しました。勿論 滝宮天満宮 へは毎年成人の日に行き、それぞれの時の試験合格をお願いしてきました。その琴弾神社の中の天満宮へ立ち寄るときは、大抵が朝早くで、霧が出ていたこともありまして、私のように子供さんの合格祈願に来たと思われる人にも出会いました。日本最大の祟り神といえば菅原道真公と崇徳上皇、そして藤原の将門となっております。その菅原道真公が今では学問の神様で、その神様に合格を祈るとは不思議な気がします。

道真公ゆかりの神社。

さて崇徳上皇ですが、坂出に五色台という山があります。ここは何代目かの高松松平藩当主が、どこかに霊場をつくろうじゃないかと言い出し、それでこの山に目をつけて讃岐の一大霊場として開発したということらしいです。この五色台に まぼろしの滝があります。五色台スカイラインを上がる途中、何気ない横道を歩入ると、石の鳥居があり、その先も、晴れの日は何もありません。しかし、一端雨が降ると思わぬ落差の滝が出現し、激しく流れ落ちます。稚児の滝といいます。少量の雨でも怖いぐらいの水量で、遠目にも見事な滝です。

さらに山の中腹辺りに駐車場があって、ここは瀬戸内海を望む展望台もある桜の名所です。ここで下車し、白峰寺へ上がって行きます。小さな山門を入ると、奥に白峰御陵があります。崇徳上皇の御陵です。拝観料を取られたと思います。

崇徳上皇の怨念を世に知らしめたのは、やはり 雨月物語 白峯 からでしょう。しかし、上皇は天狗になった聞いて、今の私達は怖いでしょうか。怪異を感じるでしょうか。この直ぐ後に、牛若に武術を教えたのも天狗でしたし、鞍馬天狗はヒーローでした。たぶん当時の人たちと、感じ方が違ってきているのだとおもいます。

しかし上皇の怨念は 皇を民とし、民を皇とする と言われました。事実、清盛が実質的な支配者となってゆくのがこの時期です。保元平治の乱は、天皇家が王家であった最後の時でした。そして、日本史の中でもこの時ほど、最も華麗でかつ野卑、混沌のなかに野心と秩序を尊ぶ生き生きとした時代はないと思います。もはや古い秩序でありながら、なぜか下剋上をなすものがそれを破壊しつくさないで温存しておく、そんな時代になって行きます。何故なのでしょう。

荘園は、その姿を時代に合わせて変えて行きます。農地は元々は公地公民であって、国家の財政基盤でありました。その中に私有を認める律令が出来、私有地が生まれます。土地は最重要の生産手段でありました。そこに国家の手の及ばぬ所が出来てしまったのです。それを白川法皇が国家に没収しようとし、すると有力貴族、摂関家、大寺社に荘園を寄進し、税を免れようとし、遂には天皇、院そのものに荘園を寄進する動きさえ出てきます。その現勢力に依存しようとしたのが豪族であり、番犬とよばれた武士でありました。平氏は源氏よりもはやく豪族を統合し、富を蓄えました。それゆえ、源氏よりもさきに政権の側に立てたのでした。そしてさらに宋との貿易で、貨幣経済 を目指し、所謂グローバル化によって富を手にしようとし、そして一時期それは大成功を収めますが、時代が早すぎました。時代はあくまで土地と言う生産手段に頼らなければならない地点にありました。それゆえ私有地、つまり荘園の安堵をしてくれる源氏に武士勢力が集まりました。鎌倉、室町の政権の主な仕事は、土地の所有権争いの調停でありました。

しかし 平家納経 の華麗さはどうでしょう。巖島神社はいまも残っています。

おっと、崇徳上皇のことでした。怨霊と化した崇徳上皇を西行さんがお慰めします。その西行さんの 西行庵 が善通寺にあります。

その崇徳上皇が崩御された際、讃岐の国司はご遺体の扱いに苦慮し、都にお伺いをたてました。

そのとき、ご遺体が痛んではいけないと保存のために湧水に浮かべて保存を図りました。都からのご支持が来るまでに七日かかりましたが、その間、ご遺体はどこも損傷することなく、保存できていたといわれております。その池が今、八十場のところてんとして有名な、清水屋というお店の前の湧水の池です。その小さな池は、いまも本当に冷たい水を満々とたたえております。

ところが国司の待っていた都からのご返事は案に相違して、ご遺体を都に返してはならぬということでした。上皇様はお亡くなりになっても都に帰れぬのかと、国司と上皇側近の人たちは嘆き悲しんだということです。そして、国司は仕方なく、ご遺体をこの地に丁重にご安置申し上げました。その崇徳上皇の陵が坂出市青海町にある白峯陵（しらみねのみささぎ）で、四国八十八箇所第八十一番札所白峯寺に隣接したところにあつて、四国で唯一の天皇陵でもあります。そして、上皇は生前、四国の守り神とならんとおっしゃられておられたとか。

明治天皇はその即位に際して勅使をおつかわしになりました。昭和天皇も同じでした。

日本の神々 日本の面影

やはり何時までも小泉八雲氏は、心にかかる文学者です。そうだからと言って、怪談ばかりが中心にあるわけではありません。かの人は、海外における日本人論の先駆者でした。怪談はその活動の一つほどのもので、彼は随筆家であり日本研究家、日本民族研究家、紀行文作家でもありました。

その成果の一つが日本の面影という作品で、特にその中の日本人の微笑と言う文章に今こだわっています。この文章は、当時最高の日本人論と言われておりました。

この文章に書かれた日本人のほほえみは芥川の手巾（ハンカチ）を連想させますが、八雲先生の理解する日本人のほほえみからしてみると、それはその一部一例でしかありません。他に2例ほど例をあげています。そして、その全てが英国人の体験談です。異文化の衝突の例示ですから、当然の事と思います。

もう英国人が日本に住んでいる時代の事ですから、明治も中ごろの事かと思います。山の手の英国人が馬で下へおりる最中に、俵夫が人力車を引いて上がってくるのに出くわします。ところが俵夫は間違えて人力車をカーブの下の方に避けます。すると人力棒が道の真ん中の方にはみ出て、馬の肩にぶつかりました。馬に乗っていた英国人はこれに怒り、かっとなって鞭で俵夫を叩きます。すると一瞬俵夫は英国人を見つめ、微笑んで頭を下げたのでした。英国人は一層怒りが増しますが、後で打ちのめされたような敗北感に襲われます。しかし、この体験を語った英国人は、今でもこの日本人の微笑が理解できないと語ります。

二例目はまさに手巾のそれで、英国夫人につかえる日本人の召使いが、微笑しながら主人が亡くなったので葬式に行かせてほしいと頼みます。夫人がそれを許可すると、翌日早くも帰って来て礼を述べ、笑いながら（声を立てて笑いながら、と書いてあります。これは頷けないのですが）骨壺を見せ、これが主人ですと報告します。蓋を開けた骨壺の中には歯が見えたと言います。夫人は、声を立てて笑いながら報告する日本人の召使いに不信感を感じ、愚劣だと言います。

かと思うと、古風で礼儀正しい老人の武士を、日本語の教師として雇い入れた英国人は、まるで殿様に使えるようにふるまう物静かで慇懃な老人から、暮れに腰にさした大小どちらかの刀を担保に少々お金を貸してほしいと頼まれます。英国人は大刀の担保を取って、お金を融通してやります。

ある時英国人は、その老人に何かのきっかけでひどく侮辱的な言葉をもって老人をののしり、打擲します。しかし老人は微笑を浮かべながらじっと耐えておりました。しかしとうとう刀に手をかけ、素早く抜いて英国人の頭上に剣先を走らせ、納めます。そして静かに退出します。英国人は後悔し、老人に詫びようと思いましたが、それはかないませんでした。老人は一通の遺書を残し、切腹して果てました。英国人に打擲されるような屈辱を受けても、暮れにお金を貸してもらった恩義を思うと、その屈辱を晴らすことは出来なかった。これは武士として恥であると遺書に書き残し、彼は腹を切って果てます。

八雲先生にとっても、これらのことは理解不能なことだったのでしょう。八雲先生は、まず最初に、英国人は大變生まじめであると言います。それも、表面だけのまじめさではなく、民族性の根底にいたるまで徹頭徹尾、生まじめであることは、だれもがみとめるところであると言います。それに比べ、日本人はあまり生まじめではなくて、そのぶんだけ、幸福であり、文明世界の中で、今も尚一番幸福な国民であろう、と評します。そして、ここから西洋人の怒り顔と日本人の微笑は、それぞれ相互理解のできない事柄であるといい、そこで先の三つの例をあげました。そしてさらに考察を進め、日本人の微笑は、表面を取り繕ったりごまかしてしまうためのものではなく、民族性に根差した深い意味があるとを解いてゆきます。

もっと不思議な微笑の意味も、私には分かるようになった。日本人は、死を前にしても笑うことが出来るし、また、いつもそうしている。

その微笑には反抗も偽善もない。・・・、弱弱しいあきらめの微笑とも混同してはならない。それは入念に、長い年月のあいだに洗練された一つの作法なのである。それはまた、沈黙のこぼれでもある。

この引用が、この日本人の微笑についての、八雲先生の結論だと言っていると思います。そして日本人の微笑は、うっとりさせるほどの心地よいものだと言います。そして、それがこのことを理解していない西洋人からすれば、事によれば場所柄、事柄をわきまえず笑っていると勘違いされ、激しい怒りをまねくことになると言います。その理解から、八雲先生は二例目の英国夫人に、この家政婦の態度が無情であるどころか、まことに立派で大いに感動させうるものであることを理解させるのは、まったく不可能であろうと結論付けます。そして更に八雲先生は、日本人の微笑について考察を深めます。

八雲先生は、日本人の微笑を理解するためには、日本古来の、自然な、民衆の生活に踏み込んで行きます。この時、近代化された上流階級からはなんら学ぶべきものはないと言い切ります。八雲先生には、日本人は明治以来に始まった高度な西洋教育を身につければつけるほど、心理的にますます西洋人から離れて行くと見えていました。完全に近代化された日本のエリート階級は西洋の思想家との間に知的共感などまったく存在せず、日本人の側に冷たい、申し分のない礼儀正しさが見られるようになるだけである、と言います。これには多分、八雲先生の中に一種の前提があると思います。西洋の教育は、知性の拡大と情緒的な感性の広がり、深化を結びつけて育てるものだと思っていると述べていることから、そうと解ります。日本人もかつて、月を愛で、花を愛し、四季折々の情緒を歌うようになりました。それは主に中国の漢詩から啓発されたものでした。月は美しいものだ、花を愛でようとするようになって、情緒的な感性が広がりを増しました。しかしこれは学問ではなく、身につけておくべき教養であると心得ていたのではないかと思います。つまり、西洋の教育は実学としての学問であって、教養とは異なっていると区別していたのではないかと思うのです。更に江戸時代の昌平黌、藩校は、四書五経が中心の教育でありました。ですから、高等教育を受けたエリート階級は、申し分のない礼儀正しさをおのずと身につける事を是とするようになったのだと思います。優れた古典文学や詩を暗唱できることが、西洋の高度な教育の一環でありましたから、それを前提にする八雲先生には、そのような日本人は不可解に見えたことでしょう。

神々の温顔 一

八雲先生の考察は更に多岐にわたり、深まって行きます。先生は京都で出会ったお地蔵さまと、それを拝みに来た10歳ほどの男の子の思い出に及びます。お地蔵様は、美しい童子の姿であり、その微笑は神々しいばかりに真にせまっていたと言います。そしてそのお地蔵様の前で小さな手を合わせる男の子の無心な微笑は、不思議にもお地蔵さまの微笑にも似て、少年は地蔵の双子の兄弟のように思われたのです。八雲先生は「聖堂や石の像の微笑は、たんなる模写ではない。仏師がそれによって表そうとしたものは、民族の微笑の意味であるにちがいない」と思い当り

ます。日本人の微笑は、菩薩の微笑と同じ概念一つまり、自制と克己から生れる幸福をあらわしている。それは西洋が宗教的思索に思い煩っているほど、日本人はそうした問題に煩わされていないからで、それは仏教の教理には西洋の神学より、ずっとはるかに深いものが含まれており、われわれは思索の達しうるぎりぎりの極限まで船を進めて行って、水平線がなお消えないことがわかったのですと、日本人に語らせています。このことは、日本の文化を考察するうえで、西洋の文化を対象のものとして比較しているので、こうした結論に結びついてくるのだと思います。しかし八雲先生自身は、その前提である西洋については多くを語っていません。八雲先生はある論文から引用して、西洋の社会形態は、誰しもが持っている利己心をほしいままに振り回し、人間の欲望を自由に発達させ、華美と浪費を極めてようとするには甚だ魅力的である、要するに人間の利己心の自由な活動に基づいている社会形態だと言っております。ですから、西洋では、社会的混乱などほとんど関心をよびません。時代が変われば混乱するのが当たり前で、もし混乱が起これば、人間の利己心、欲望が自由闊達に活動できない社会体制にこそ問題があって、それを解決することが社会体制をより良く改革することに繋がると考えます。人間の利己的欲望が満足させられないのは、社会体制に誤りがあるから、これを改革しなければならないと、西洋では考えるというのです。これは、日本人論を書きながらの、西洋文明の批判であると思います。

そのような利己心と欲望に基づいた社会体制は、それらに寄与するための倫理や道德などでは治まりません。人間の願望が自然の法則をつくるという進化論を単純に信じて疑わない以上、それは失意と墮落に終わるに違いない。闘争を続けるのが、彼らの運命なのである。と、かなり手厳しい西洋文明批判を展開した論文を、かなり長く引用します。八雲先生は稀有の文学者ではありますが、社会学者ではないので、自分の納得した論文をここまで引用したのだと思います。その後、急速に西洋化、つまり近代化してゆく日本が次第に失ってゆくであろう道徳的な特質を、先生は予想します。日本は西洋のもっとも優れた思想家たちが、もっとも幸福な最高のものとみなしている社会形態を、限られた範囲ではあるが、いくつか実現していたのであると言います。神とか絶対的権威とか王権神授説を捨り出して、その名をもって権利と義務を社会契約として法律とし、やっと社会的体制の小康を得ているだけの西洋に対して、日本をこのように評価します。しかし、資本主義なんて言葉は使ってはいませんが、古い日本が資本主義に経済体制を移してゆく過程で、多くのものを失ってゆくだろうと、悲しみとともに語ります。その言葉は、詩的でさえあります。

かならず日本が振り返って見る時があるだろう。素朴な喜びを受け入れる能力の忘却を、純粹な生の悦びに対する感覚の喪失を、はるか昔の自然との愛すべき聖なる親しみを、また、それらを映していた、今は滅んだ驚くべき芸術を、懐かしむようになるだろう。かつて世界がどれほど光に満ち、美しく見えたかを思い出すであろう。古風な忍耐と献身、昔ながらの礼儀正しさ、古い信仰のもつ深い人間的な詩情—こうしたいりんなものを思い悲しむことであろう。その時日本が驚嘆するものは多いただろう。が、後悔も多いはずである。おそらく、その中でもっとも驚嘆するものは、古い神々の温顔ではなかろうか。その微笑こそが、かつての日本人の微笑にほかならないからである。

ながい引用になりましたが、もはや私ごときの解釈を越えております。全ては、優れた文学者、ラフ化ディオ・ハーン、ヘルン先生の文章に表されていると思っています。

神々の温顔 一

日本人の微笑のなかで、八雲先生はこの日本人の美質は失われるだろうと予言されておりましたが、失われたのでしょうか。失われたとして、では、何を失ったのでしょうか。考えてみると、八雲氏が日本に来られたのは、明治でありました。私のような昭和、それも戦後生まれの団塊の世代には、明治など知る由もありません。しかし、私たちの両親の世代は、遠くても大正生まれか戦前の昭和の世代でほぼ括られると思います。つまり、祖父祖母は、明治でありました。ごく身近に、明治は生きていました。実例はそこにありました。たしかにそれぞれの世代で特質と言うか、生き方も違っていると思います。甘っちょろい戦後世代、じっと耐え抜いた父母の世代、骨太な気骨のある明治の世代――一言で言い分けると、こんな印象を持ちます。

しかし、そんな世代間の相違を論じても、八雲先生の言う、失われたものに行き着くとは思えません。そんな手探りのなかで、イザベラ・バード女史に思い当りました。彼女はスコットランド出身の大旅行家で、明治11年には早や日本を訪れており、以来、日本へ五回ほど来ております。大旅行家であるゆえに、彼女は日本のみならず、朝鮮も四回、行っておりますし、他にもアメリカ、カナダ、清国、ペルシャ、チベットまで旅行して回り、それぞれの土地に忌憚のない文章を寄せています。

日本では関東から北上し、北海道まで回っているのですが、やはり都会育ちのお嬢さんらしく、きちんと整備された県庁所在地に滞在した時は、大変良い評価の文章をつづり、田舎の辺りについては蚤虱、蚊に悩まされて悪口雑言を吐きまくりです。さらに田舎者についても、今まで会ったどの未開人よりも礼儀知らずで不潔だと言っただけです。

彼らは礼儀正しく、やさしくて勤勉で、ひどい罪悪を犯すようなことは全くない。しかし、私が日本人と話をかわしたり、いろいろ多くものを見た結果として、彼らの基本道徳の水準は非常に低いものであり、生活は誠実でもなければ清純でもない、と判断せざるをえない。

と、肯定するのかと思えば、否定もします。これは日本人の容姿にも及び、

上陸して最初に私の受けた印象は、浮浪者がひとりもいないことであった。街頭には、小柄で、醜くしなびて、がにまたで、猫背で、胸は凹み、貧相だが優しそうな顔をした連中がいたが、いずれもみな自分の仕事をもっていた。

日本人は、西洋の服装をすると、とても小さく見える。どの服も合わない。日本人のみじめな体格、凹んだ胸部、がにまた足という国民的欠陥をいっそうひどくさせるだけである。

と酷評します。しかし、彼女の見た日本は、

私はそれから奥地や北海道を一二〇〇マイルにわたって旅をしたが、まったく安全で、しかも心配もなかった。世界中で日本ほど、婦人が危険にも無作法な目にもあわず、まったく安全に旅行できる国はないと私は信じている。

私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手を取り、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭りに連れて行き、子どもがいないといつもつまらなそうである。

と語り、彼女の価値の基準である、キリスト教と西洋文明を標準とした価値観を絶対として否定しながらも、日本人を認めている風がうかがえます。そして、子供については、

いくつかの理由から、彼らは男の子の方を好むが、それと同じほど女の子もかわいがり愛していることは確かである。子どもたちは、私たちの考えからすれば、あまりにもおとなしく、儀礼的にすぎるが、その顔つきや振舞いは、人に大きな好感をいだかせる。

と、好感をもって見ています。しかし、県庁所在地などの、文明開化の波がまだ押し寄せていな

い地方では、

見るも痛々しいのは、疥癬、しらくも頭、たむし、ただれ目、不健康そうな発疹など嫌な病気が蔓延していることである。村人達の三〇パーセントは、天然痘のひどい跡を残している。

そこで私はキサゴイ（小佐越）という小さな山村で馬を交替したときは、ほっとした。ここはたいそう貧しいところで、みじめな家屋があり、子どもたちはとても汚く、ひどい皮膚病にかかっていた。女たちは顔色もすぐれず、酷い労働と焚火のひどい煙のために顔もゆがんで全く醜くなっていた。その姿は彫像そのもののように見えた。

の記述通り、あまりの非衛生的なことにあきれ返っています。さらに、

仕事中はみな胴着とズボンをつけているが、家にいるときは短い下スカートをつけているだけである。何人かりっぱな家のお母さん方が、この服装だけで少しも恥ずかしいとも思わずに、道路を横ぎり他の家を訪問している姿を私は見た。幼い子どもたちは、首から紐でお守り袋をかけたままの裸姿である。彼らの身体や着物、家屋には害虫がたかっている。独立勤勉の人たちに対して汚くてむさくるしいという言葉を用いてよいものならば、彼らはまさにそれである。

と、その観察の及ぶところを述べ、もはや、文明社会から遥かに遅れた日本の田舎を半ば憐れみます。

しかし、これは小泉八雲先生の述べているところですが、

ヨーロッパの多くの国々や、わがイギリスでも地方によっては、外国の服装をした女性の一人旅は、実際の危害を受けるまではゆかなくとも、無礼や侮辱の仕打ちにあったり、お金をゆすりとられるのであるが、ここでは私は、一度も失礼な目にあったこともなければ、真に過大な料金をとられた例もない。群集にとり囲まれても、失礼なことをされることはない。

ほんの昨日のことであったが、革帯が一つ紛失していた。もう暗くなっていたが、その馬子はそのを探しに一里も戻った。彼にその骨折賃として何銭かあげようとしたが、彼は、旅の終りまで無事届けるのが当然の責任だ、と言って、どうしてもお金を受けとらなかった。

彼らは礼儀正しく、やさしくて勤勉で、ひどい罪悪を犯すようなことは全くない。しかし、私が日本人と話をかわしたり、いろいろ多くのものを見た結果として、彼らの基本道徳の水準は非常に低いものであり、生活は誠実でもなければ清純でもない、と判断せざるをえない。

と、西洋とは違ったところで道徳的な平穩を実現した日本社会を見出しております。私自身は、イザベラ女史のいう、彼らの基本道徳の水準は非常に低いものであり、生活は誠実でもなければ清純でもない、と判断せざるをえない、と言うところは、敬虔なカトリック教徒であった女史の信仰生活に比して、日本人は神をも恐れないようにみえたのではないかと思います。

このていねいで勤勉で文明化した国民の中に全く溶け込んで生活していると、その風俗習慣を、英国民のように何世紀にもわたってキリスト教に培われた国民の風俗習慣と比較してみると、日本人に対して大いに不当な扱いをしたことになるということを忘れるようになる。この国民と比較しても常に英国民が劣らぬように《残念ながら実際にはそうではない！》英国民がますますキリスト教化されんことを神に祈る。

といった文章がのちに出てくるからです。また、ここでも八雲先生の言う、何かしらの絶対権威をもって規律をようやくもたらした西洋社会の姿が垣間見られるところでもあります。

神々の温顔 二

朝の五時までには豊岡の人はみな集まってきて、私が朝食をとっているとき、私は家の外のすべての人びとの注目の的となったばかりでなく、土間に立って梯子段から上を見あげている約四十人の人々にじろじろ見られていた。宿の主人が、立ち去ってくれ、というと、彼らは言った。「

こんなすばらしい見世物を自分一人占めにしてるのは公平でもないし、隣人らしくもない。私たちは、二度とまた外国の女を見る機会もなく一生を終わるかもしれないから」。そこで彼らは、そのまま居すわることができたのである！

この無作法さ！外国の女をまるで見世物見物のように見物して立ち去らないのです。これは罵りたくもなろうというものです。だが、彼女も次第に日本人を理解し始めます。

私はどこでも見られる人びとの親切さについて話したい。二人の馬子は特に親切であった。私がこのような奥地に久しく足どめさせられるのではないかと心配して、何とか早く北海道へ渡ろうとしていることを知って、彼らは全力をあげて援助してくれた。馬から下りるときには私をていねいに持ち上げてくれたり、馬に乗るときは背中を踏み台にしてくれた。あるいは両手にいっぱい野苺を持ってきてくれた。それはいやな薬の臭いがしたが、折角なので食べた。

私の宿料は《伊藤の分も入れて》一日で三シリングもかからない。どこの宿でも、私が気持ちよく泊れるようにと、心から願っている。日本人でさえも大きな街道筋を旅するのに、そこから離れた小さな粗末な部落にしばしば宿泊したことを考慮すると、宿泊の設備は、蚤と悪臭を除けば、驚くべきほど優秀であった。世界中どこへ行っても、同じような田舎では、日本の宿屋に比較できるようなものはあるまいと思われる。

蚤、虱、蚊等に悩まされ、最初は罵倒に近い書き方でありました宿の事も、無作法な態度への怒りも、かくも和らいだ印象をつづるようになります。そして、日本人の振舞いに驚嘆までします。

ヨーロッパの多くの国々や、わがイギリスでも地方によっては、外国の服装をした女性の一人旅は、実際の危害を受けるまではゆかなくとも、無礼や侮辱の仕打ちにあったり、お金をゆすりとられるのであるが、ここでは私は、一度も失礼な目にあったこともなければ、真に過大な料金をとられた例もない。群集にとり囲まれても、失礼なことをされることはない。

ほんの昨日のことであったが、革帯が一つ紛失していた。もう暗くなっていたが、その馬子はそれを探しに一里も戻った。彼にその骨折賃として何銭かあげようとしたが、彼は、旅の終りまで無事届けるのが当然の責任だ、と言って、どうしてもお金を受けとらなかった。

今の日本人だって、こうすると思います。落とした財布が出てくる確率の一番高い国が日本ですから。

家の女たちは、私が暑くて困っているのを見て、うやうやしく団扇をもってきて、まる一時間も私をあおいでくれた。料金をたずねると、少しもいらぬ、と言ひ、どうしても受けとらなかった。彼らは今まで外国人を見たこともなく、少しでも取るようなことがあったら恥ずべきことだ、と言った。

多くの点において、特に表面に現れているものにおいては、日本人は英国人よりも大いにすぐれている。しかし他の多くの点では、日本人は英国人よりはるかに劣っている。このていねいで勤勉で文明化した国民の中に全く溶け込んで生活していると、その風俗習慣を、英国民のように何世紀にもわたってキリスト教に培われた国民の風俗習慣と比較してみることは、日本人に対して大いに不当な扱いをしたことになるということを忘れるようになる。この国民と比較しても常に英国民が劣らぬように《残念ながら実際にはそうではない！》英国民がますますキリスト教化されんことを神に祈る。

このあたりの文章は、八雲先生の感想と一致していると思います。

伊藤は私の夕食用に一羽の鶏を買って来た。ところが一時間後にそれを絞め殺そうとしたとき、元の所有者がたいへん悲しげな顔をしてお金を返しに来た。彼女はその鶏を育ててきたので、殺されるのを見るに忍びない、というのである。こんな遠い片田舎の未開の土地で、こういうことがあるとは。私は直感的に、ここは人情の美しいところであると感じた。

色々なところを、ほとんど無作為に引用してしまいましたが、結局イザベラバード女史は日本に5回もやってくるのです。そして山形県の盆地の風景を見て、東洋のアルカディアと呼んでおります。そして人々に対しても八雲先生と同じ印象を抱きます。物質文明としては劣っているかもしれないが、礼儀正しく道徳的で、日本人は心優しいと。

神々の温顔 三

八雲先生に失うであろうと予言されたものを、我々は今失っているかもしれません。四季の麗しさに心を震わせて感動する心とか、自然の中に神々を感じる感性とか、それから生まれる繊細な芸術などを、八雲先生は失うと予言されました。しかし、神々の温顔に漂う微笑を、日本人の中に見ました。ちょっと褒め殺しほどの褒め方と思います。それをもっと現実的な見方をしたのが、イザベラバード女史でありました。胴長短足、洋服を着せると、これほど似合わない民族はいないと断言しております。でも、成長のいい現代の子供たちは、そうと決めつけられないほど足も長くなっていると思いますが、この物質的豊かさの中で得た足の長さの代わりに、繊細な、感動する心は失ったかもしれません。

ではサムライとは何か、と問われれば、自律心出ある、ひとたびイエスといった以上は命がけでその言葉をまもる、自分の名誉も命を賭けて守る、敵に対する情。さらには私心をもたない、また私に奉ぜず、公に奉ずる、ということでありましょう。それ以外に、世界に自分自身を説明することはなかったのです。

これは新渡戸稲造の 武士 よりの引用です。これを見ると、八雲先生の挙げた実例のひとつそのままだと思います。

また明治の人は、勤勉で教養も深かったと思います。幸田文さんが、女学院で三国志だったか水滸伝を勉強しているという、露伴先生から、あんなもんはただの読み物だったといわれたと、なにかに書いておりました。これと同じことを、芥川龍之介も言っております。あれは、寝っ転がって読んでいたと。勤勉に、真剣に学問にはげむなんて、昔の古臭い精神なんですか。

ゆとり教育だの、運動会の徒競走に、一番二番を決めないのが昨今ですから。

しかし、これは時代の表面の話と思っています。旅行中のイザベラバード女史を物珍しく見物した、不躰な田舎の女たちは、ひたすら働き、おしんのように生きました。そんな人たちの毎日は、時代の流れに取り残され、後から押されはしたでしょうが、そうも変わったことはなかったのではないかとも思ったりします。少なくとも、その心根は変わっちゃいません。3・11の後、じっと耐えて生きている人たちの生き方は、震災の後の様々なエピソードを聞くと、よくわかります。助けに来てくれた米軍兵に、なけなしのお米を炊いて、おにぎりを作ってお礼にしたとか、そうしないと気が収まらないのが日本人だと思います。

武士道も、神社に参って手を合わせることも、昔から日本人はしてきました。失ったものはあります。消えようとしているものもあります。それでも、日本には1300年前の法隆寺も、天皇即位の高御座も、舞楽も残っています。現代の生活のすぐ横にこそなくとも、あって当然のごとく、伝統は残っています。それは多分民族性と言ってしまってもいいのではないかと思います。時代の背景で色々になりはしてきましたが、万世一系の天皇様がいる国ですから。でも、私は右翼ではありません。